『記念碑に刻まれたドイツ――戦争・革命・統一――』

松本　彰著

北村昌史

著者の松本彰氏は、一九世紀のドイツ統一にはじまり、「特殊の道」論争の紹介、市民概念の再検討、音楽の社会史研究と様々な側面から近現代における「ドイツ」とは何かという課題に取り組み、そうした成果に一つの見通しをつけることを長く期待されてきた。「記念碑」という観点からこの二百年のドイツ史を通観した本書は著者の長年の成果の、まさに集大成というにふさわしい。

序章「記念碑の歴史学」では、近年まで関心が高くなかった記念碑を除外した歴史研究は一面的と指摘したうえ、本書のスタンスがのべられる。一九八〇年代以降、ヴァイツゼッカー大統領演説やノラ編『記憶の場』の刊行をきっかけとして、学際的・国際的に「記憶」についての議論が盛んになった。『記憶の場』プロジェクトでは、「記憶」が「記録」され、「記念」され、歴史的過去が文化遺産とされていくプロセスが問題とされる。ドイツ「国民」には「ドイツを構成する諸国家の国民」、「ドイツ帝国国民」、そして中欧・東欧に植民した人をも含む「ドイツ文化国民」の三層があるが、三回の統一（一八七一年、一九三八年、一九九一年）は、それぞれ範囲が異なり、「ドイツ」や「ドイツ人」で何が問題となるか複雑となる。ドイツは首都のない国である。ウィーン・ベルリン・ミュンヘン・ドレスデンが宮廷政治と文化を継承する代表的都市であり、世紀転換期文化の舞台や第二次世界大戦の傷跡と悲劇の記念碑がもうけられるが、他にも、様々な性格の都市が多元的な構造を形成する。「ドイツ統一」を見えるものにするために記念碑が必要なのである。「ドイツ」をめぐって平時には個人のアイデンティティが複合的であってさしつかえないが、戦時には「ドイツは一つ」になる。その際、強力な国家のための誇り高い市民＝国民＝「兵士としての男」が称揚され、マイノリティは差別・抑圧の対象となる。本書では三つの視角から記念碑が分析される。第一は、誰が何のため作り、どのように受け止められたのかの政治的意味を問う、記念碑の政治学である。第二が、時代の美意識との関わりを問う、記念碑の美学である。そして、第三が記念碑の宗教学であり、とくに戦争記念碑は戦死者や戦争犠牲者の墓と関係しており、近代国家も宗教と関係をもったことを分析の俎上にのせる。

第一章「中欧の二つの帝国――長い一九世紀（一七八九－一九一四）その1」では、この時期の記念碑の問題を「ドイツ諸国家の国民」と「ドイツ帝国国民」の次元で論じる。プロイセン・ドイツ帝国の首都ベルリン、ハプスブルク帝国の首都ウィーン、そしてバイエルンの首都ミュンヘンに焦点があてられる。まず、ナポレオンとの戦争に勝利したライプチヒの「諸国民会戦」の勝利が、三国それぞれのコンテクストで「記念」される。一八四八年革命、一八六〇年代の経済的飛躍とコーブルク（革命後十数年の

統一と自由の中心)、解放戦争五〇年、普墺戦争が記念される。オーストリア・ハンガリー二重帝国(一八六七年)とドイツ帝国(一八七一年)の時代になると、戦争によって成立した国家を正当化し、その記憶を伝えるため軍事史博物館が作られ、他方一般兵士のための個人墓が作られるようになる。統一のための三つの戦争の勝利を記念する〈戦勝柱〉がベルリンに建てられ、それと向かい合う形で国会議事堂とビスマルク像が建てられた。ドイツ帝国は正統性を「近代性」と「帝国の連続性」の歴史に求めるが、実現した「小ドイツ」は不完全なものであった。それで、ヴィルヘルム一世像、さらにはビスマルク像がドイツ各地に作られる。解放戦争百年にはドイツ帝国では巨大な記念碑が作られ、ライプチヒの戦いで倒れた兵士の遺体を埋葬する〈リンデンタールの集団墓〉が整備される。ウィーンでも〈諸国民会戦記念碑〉が作られた。

第二章「ドイツの表象=国民記念日——長い一九世紀(一七八九-一九一四)その2」では、「ドイツ文化国民」の側面があつかわれる。「バイエルン国民」を象徴する〈バイエルン国民博物館〉、「ドイツ帝国国民」の博物館〈ドイツ博物館〉、そして「ドイツ文化国民」のための〈ゲルマン国民博物館〉が、ミュンヘンにおいて並立していることが示すように、これらの関係は複雑である。中断されていたケルンの大聖堂(カトリック)建築を促進したのは、プロテスタントのプロイセン国家であり、大聖堂、そしてそれと並ぶ〈ホーエンツォレルン鉄橋〉(一九一一年)にもうけられた一九世紀のプロイセン国王像と鉄道が「プロイセン主導のドイツ統一」のシンボルとなる。忘れられていたバッハを復興する動きも、プロテスタントのプロイセンがドイツを統一する過程と並行する。一方でドイツ全体を表彰する巨大な記念碑が見晴らしのよい丘に建てられる。

第三章「第一次世界大戦と戦没兵士の記念碑——現代の三〇年戦争(一九一四-一九四五)その1」では、二〇世紀前半に大戦が繰り返された背景を探るため第一次世界大戦がどのように記憶・記念されたのかが探られる。第一次世界大戦の結果として二つの帝国は解体し、二つの共和国が成立する。第一次世界大戦は、「国民国家の時代」の頂点であり、それを象徴するのが「無名兵士の墓」である。大戦中はすべての墓を個人墓とするように通達が出たが、実際には「一人の無名兵士」が存在し、そこから「記念碑としての無名兵士の墓」が誕生する。戦場に埋葬された兵士は、戦後各地の兵士墓地に改葬される。他方、イギリスやフランスでは、首都に「無名兵士の墓」が作られる一方、ドイツ・オーストリアでは、戦争開始と同時に「無名兵士の戦争墓」は作られるが、首都には「記念碑としての無名兵士の墓」は作られない。「敗戦を信じようとしない」が「戦争を祝えない」両国では戦没兵士の記念碑の建設に熱中する。イングランドと同様に、ドイツ・フランスでも州・市町村、教会、戦友会が争って栄誉の碑を建てた。そうした中でベルリン、ミュンヘン、ウィーンにある解放戦争記念碑も第一次世界大戦の兵士の栄誉をたたえるべく改装される。

第四章「ナチズムとドイツ表現派——現代の三〇年戦争(一九一四-一九四五)その2」では、ヒトラーの時代の記念碑がとりあげられる。ナチズムといえばラジオや映画などの「ニューメデ

ィア」に注目がいくが、ナチズムは記念碑、祭典などの「オールドメディア」も発展させる。そこでは「祭典の場」が決定的に重要になり、記念碑は「用いる」ものとなる。一般大衆には様々な機会におこなわれる祭典が重要であり、一九三九年になるとベルリン、ミュンヘン、ニュルンベルクなどといった街の、ナチ美学に基づく都市改造がはじまる。たとえば、〈戦勝柱〉は、第一次世界大戦ではドイツは勝利していたとして一段加えられ、現在もある〈大きな星〉に移動させられた。一九三八年のドイツ統一（＝オーストリア併合）をきっかけに「ドイツ民族のゲルマン帝国」が実現し、ナチは全ドイツを要塞化していく。一九三〇年代は芸術と政治が異常な緊張関係にあった時代であり、それが最もはっきり表れたのが三七年に「大ドイツ芸術展」と争う形で開催された「退廃芸術展」「退廃音楽展」である。そこでは、ヴァイマル期に市民権をもった象徴主義が「民主主義的」「ユダヤ的」「世界市民的」で「退廃的」で「不健全」というレッテルを貼られた。象徴主義の芸術家の政治的立場は多様であった。そのうち、第一次世界大戦に協力したものの幻滅したエルンスト・バルラッハがハンブルクのダムトーア通りに作った〈第一次世界大戦戦没兵士栄誉の碑〉とそれに対する対抗記念碑、およびそれらをめぐる論争を通して、「栄誉の碑」から「警告の碑」への戦争をめぐる記念碑の転換が指摘される。

第五章「三つの国家の「過去の克服」と記念政策――『第二次世界大戦とナチズム』後（一九四五－一九九〇）」では、「第二次世界大戦とナチズム」「アウシュヴィッツと広島」を記憶・記録・記念するのが人類の課題となり、西ドイツ、東ドイツ、そしてオーストリアが記念政策を明確にするために記念碑を作らなければならなかった状況がのべられる。三つのドイツ国家は、「過去＝ナチズムの克服」を課題としたが、それぞれ立場が異なる。両ドイツは、東西対立の最前線に位置し、オーストリアは「永世中立」がその立場となる。ナチズムは西ドイツでは「内在化」、東ドイツでは「普遍化」、そしてオーストリアでは「外在化」された。それに応じて、記念碑の政策は次のように違ってくる。西ドイツでは、「暴力支配の犠牲者」にナチズムの犠牲者と共産主義者の犠牲者が含まれ、強制収容所や抵抗運動の記念碑とともに、ナチズムの犠牲者と共産主義の犠牲者の記念碑がもうけられた。八五年のヴァイツゼッカー演説をきっかけに、「シンティとロマ」「同性愛者」「精神病患者」といった忘れられた犠牲者にも注目される。東ドイツでは、一九世紀にシンケルが設計し、ヴァイマル期にテッセノウ案で改築されたベルリンの〈新衛兵所〉が「ファシズムと軍国主義のための警告の碑」となったが、ソ連に倣った形で行われた。その際、ソ連は解放者と強調され、ソ連の「栄誉の碑」が作られた。東独ではユダヤ人迫害はそれほど意識されなかったが、末期にはこの点をめぐって多くの記念碑が作られるようになり、忘れられた犠牲者の記念碑も作られた。オーストリアは、戦後一貫して自国を犠牲者の立場においていたが、合邦五〇年の八八年にオーストリア人がナチズムのもとで起こした罪の謝罪がおこなわれ、その点を意識した〈戦争とファシズムに対する警告の碑〉が作られた。最後にこの三国以外の記念碑として〈アウシュヴィッツ強制収容所〉にふれられる。

第六章「記念碑論争――『一九九〇年のドイツ統一』後」は、

統一後に記念碑が従来よりも議論された状況を語る。統一後、「歴史家の沈黙」が見られたが、旧東のマルクス像などの撤去、古い記念碑的建造物の修復、そして新しい記念碑の建造がみられ、歴史家が発言せざるをえない状況になる。〈ドイツ連邦議会議事堂〉となった旧帝国議会議事堂〉などの「新しいドイツ」を象徴する記念碑は国際的に議論となり、ドイツの顔となったベルリンでは記念碑と建造物をめぐって多くの議論がおこなわれた。こうした記念碑論争は、オーストリアも巻き込み、社会史から文化史へと歴史学界の関心が展開するなか記念と記憶をめぐって生じたものである。そうした中で「ベルリンの壁」やかつての国境施設が保存されたりした。ベルリンでも〈新衛兵所〉の改装、ユダヤ博物館、そして殺害されたヨーロッパ・ユダヤ人のための記念碑が議論を巻き起こした。ドイツ統一に伴い人々の歴史への関心が高まるが、その過程で二つのドイツの記念政策の相違が意識され、歴史、記憶、記念・想起の関係も問い直される。「第二次世界大戦」と「ナチズムの犠牲者」の関係も新たに問い直され、たとえば、〈新衛兵所〉の銘も「ファシズムと軍国主義の犠牲者へ」から「戦争と暴力支配の犠牲者へ」と変えられ、戦没ドイツ兵士も「戦争の犠牲者」として追悼されるようになる。オーストリアの記念政策も、ナチズムへの共犯関係を明白に語りながら進められ、「第二次世界大戦の犠牲者」と「ナチズムの犠牲者」の関係が意識される。

終章「ドイツ・デンマーク国境の記念碑」は、本論の内容を、ドイツの北の国境をめぐる記念碑の検討から照射し直す。ドイツとデンマークの国境は、ドイツ・デンマーク戦争や第一次世界大戦の結果移動する。モルトケなど三人の人物の経歴から「トランスナショナル」な状況が語られるとともに、国境の両側で展開した記念碑合戦ともいうべき状況が語られる。

以上、本書は、記念碑・記憶をめぐる内外の研究文献やそれぞれの記念碑を歴史的に位置づけるための地域史研究の成果などを渉猟しつつ、収録されている写真の多くが著者によるものであることが示すように、多くの記念碑への実地調査をふまえたものである。本書の意義を考える場合、現地での見聞が強く反映したものであることをまず指摘したい。著者ものべているように、歴史研究は図書館や文書館の中だけではもはや成り立たない。

本書の議論の土台としてドイツとオーストリアの領土やデンマークとの国境線を地図を使いながら、丹念に説明している点も、本書の有用性を高めている。たしかに、歴史地図集を紐解けば、ある国の国境の変遷は容易にたどれるであろう。とはいえ、「ドイツ」とは何なのかという明確な問題意識に貫かれ、一人の研究者が一九世紀から現在に至る国境の変遷を説明することにより、オーストリアも含むドイツの国境の変遷とその意味が鮮明に読み手に伝わることになる。この点に関して、さらに次の二点を指摘したい。

まず、ドイツ「国民」を「ドイツを構成する諸国家の国民」、「ドイツ帝国国民」、そして「ドイツ文化国民」の三層に分けていることは、管見によれば「国民」に様々な次元のものがあることが、日本のドイツ史研究で十分意識されてこなかっただけに重要である。とくに、「ドイツを構成する諸国家の国民」を具体的事例をふまえて論じていることの意義は大きい。

次に、本書におけるオーストリア・ハプスブルク帝国の扱いは中欧史研究にとって重要な問題提起となっている。従来、ドイツとオーストリアは別々の歴史を辿ったものととらえられてきた。一九世紀の統一をめぐる対立、ナチスによるオーストリアの「併合」、冷戦下の東西ドイツの対立と「永世中立国」オーストリアの対比が自明のように語られてきた。本書では記念碑政策を軸にドイツとオーストリアが共通の土台のもと語られ、もちろんその相違は意識されるのだが、この二つ（ないしは三つ）の国家の枠組みを超えた「ドイツ」史を描くことに成功しているのである。一九世紀以来の「小ドイツ」的通史はここに克服され、より包括的なドイツ史の叙述が誕生した。

ただ、本書の視点が、「小ドイツ」に対立する「大ドイツ」によるもの、というわけでもないことも強調しておく必要がある。それは、ドイツ統一とは異なる次元のものとして、第一に「ドイツを構成する諸国家の国民」が分析の前提となり、第二に中欧・東欧において他の民族と混住し、第二次世界大戦後にその多くが追放されたドイツ人の存在が強く意識され、そして第三にドイツとそうではない部分の境界領域に十分な配慮がなされているからである。最後の点についていえば、デンマークとの国境をめぐる記念碑の問題は、「ドイツ」（そして「デンマーク」も）が、その当時の状況のもと「記憶」「記念」されてきたものにすぎないことを示唆している。

本書は、著者の長年の研鑽をふまえた含蓄のある叙述や指摘が随所に見られる。それを二点指摘しておこう。

第一に、二度の世界大戦をきっかけとする記念碑政策の変化の分析が、当時のドイツ社会の変化を如実に示している。第一次世界大戦では戦没兵士を埋葬するのは基本的に個人墓とするように通達が出され、そこから無名兵士の墓が登場する。この状況は、漠然とした兵士一般、国民一般から、個別の兵士、個別の国民へと国家が関係をもつ対象が変わったことを示している。こうした変化は、より広くは、たとえば国家が個々人の生活を保障する「社会国家」の誕生と連動しているのであろう。第二次世界大戦を境として、「栄誉の碑」から「警告の碑」へと記念碑の重点が移ることは、「戦争」そのものへの評価・認識が大きく変わったことを示している。

第二に、「記憶」の問題は「忘却」の問題と表裏一体である。一九八〇年代以降のドイツにおいて記念碑建築が様々試みられ、また記念碑をめぐる歴史研究が進んだ背景には、ナチズムの過去を「忘却」しようという方向性がドイツ社会に確実に存在したことが指摘できる。過度に「警告」や「忘却」に偏らず、記念碑をめぐる議論を極力客観的に描こうとする本書は、そうした「忘却」と「警告」の二つのベクトルの中で揺れ動く記念碑の現状に対する、歴史家からのバランスのとれた一つの回答といえる。

以下、本書の問題点を三点指摘したい。

まず、記念碑の多くが、国家や自治体が作ったものであり、本書の叙述の中心も記念碑をめぐる政策となっている。その結果、記念碑の背景説明や状況説明は、おおむね制作した政権の政治的状況に終始し、本書全体が、旧来の政治史の枠組みを大きく超えるものではない。この論点は、第二・第三の批判点とも絡んでくる。

次に、多くの記念碑がとりあげられているが、実は記念碑そのものへの分析はそれほどなされていない。たとえば、いくつかの記念碑の作者が記され、また表現主義の影響などが指摘されるが、記念碑で利用されている象徴的な表現や芸術上の潮流、新しい創意工夫、そしてそれらの相互の関係などは十分検討されていない。その結果、「記念碑の美学」的分析から導き出されてくるであろう、当該記念碑に絡む様々なベクトルが見落とされてしまっている可能性が大きい。

それに関連して、一二五頁の写真（Ⅲ－一四－③）の〈皇妃アウグスタ近衛第四連隊栄誉の碑〉にふれたい。横たわる兵士が、覆われた布から握ったこぶしを突き出している像である。著者は、「敗北を認めようとせず、次の戦争に期待する第一次世界大戦後のドイツ人の意識を象徴している」と評価する。評者は著者の調査に同行して実際に見た時の印象からは、戦争という愚行に対する抗議、ないしは死んでしまったことに対する悔しさを表明している可能性もあるように思われた。これは、「警告の碑」を見なれたゆえに抱いた感想かもしれない。とはいえ、こうした疑問を払拭するような記念碑の様式分析のようなものが本書にもう少し組み込まれていたらと思う。

評者のこの感想は、記念碑に対する受け手の反応が多様でありえることを示している。最後に、本書では、もっぱら記念碑を作る側の意図や状況が語られ、社会的な反応まで十分検討されていないのが惜しまれる。様々な記念碑を見る側がどのように「記憶」「記念」をしたのかは、記念碑の歴史的位置づけをおこなうのに重要な論点であろう。この点は史料的に困難な課題であることは改めて強調するまでもあるまい。とはいえ、ハンブルクの記念碑論争の検討が「栄誉の碑」から「警告の碑」への変化を見事に描き出し、デンマークとの国境をめぐる両国の記念碑合戦の叙述が、国境をめぐるアイデンティティの複雑さを浮き彫りにしたことを考えると、各章ごとにこうした分析があれば本書の奥行きはさらに広がったであろう。

以上の点は、序章も示すように、著者も認識していると思われ、またの機会にご教授いただければありがたい。とはいえ、この二世紀の「ドイツ」史を「記念碑」を軸にして見事に描きかったことに本書の意義はある。誤読や誤解については著者や読者の御海容を乞うばかりである。

さて、最後に二点ほどのべておきたい。

第一に、本書の読者のうち、著者が写した写真に自分の姿を探したかたも少なくないであろう。実際、かなりの人数の日本人の姿が見てとれる。本書の記念碑の調査は、多くの研究者と同行し、彼らと現地での議論をおこないながら進められた。評者もいくつかの記念碑の調査に同行している。歴史研究は個人の営みに陥りがちであるが、本書は多くの人と情報や議論を共有しながら研究を進める可能性を示している。

第二に、「記念碑」や「記憶」といえば、ひと時代前にはやったテーマと考える読者もいるかもしれない。たとえば、ノラ編『記憶の場』（岩波書店）の翻訳が刊行されたのが、二〇〇二年から三年である。とはいえ、外国の議論の紹介にとどまらず、独自の調査をふまえた研究をおこなうにはそれなりの時間が必要である。本書によって「記憶」の問題の可能性と限界を、具体的成

果から考えることのできる段階に、日本の西洋史研究がようやく到達したのだということを強調して本書評を終えたい。

（A5判　viii＋二九二＋六〇頁　二〇一二年一〇月
東京大学出版会　税別六四〇〇円）

（大阪市立大学大学院文学研究科教授）